

# こんな患者も対象 !? 知らないでは済まされない 構造的心疾患 (SHD) 治療

近年、日常診療において「構造的心疾患 (structural heart disease: SHD)」という言葉に耳にする機会が増えてきました。SHD とは、心臓弁膜症や先天性心疾患など、血管以外の心疾患をまとめて指す用語です。これまで、これらの疾患に対する根本的な治療には、開心術などによる大きな負担を伴う外科手術が必要でした。しかし、近年の医療技術のめざましい進歩により、カテーテルなどを用いた低侵襲な治療法が次々と実用化され、SHD 治療は大きく様変わりしています。かつては開心術のリスクが高く、治療の対象と考えられなかった高齢者や低心機能の患者、あるいは再手術となる患者などに対して、これらの低侵襲治療は大きな変革 (希望の光) をもたらすようになりました。

一方で、いかに優れた低侵襲治療が存在しても、その恩恵を患者へ届けるためには、一般診療の最前線に立つ先生方による「適切な疾患の疑いと専門医への紹介」が不可欠です。心雑音の聴取をはじめ、若い女性の奇異性脳塞栓症、心房細動患者における抗凝固療法継続のリスク、繰り返す心不全に潜む僧帽弁閉鎖不全症、あるいは坐位での息切れ (platypnea orthodeoxia 症候群) など、日常の診療のなかには SHD 発見の端緒が数多く潜んでいます。

本特集では、大きく進化しつつある SHD 治療について、わが国のエキスパートの先生方に解説いただきました。総論として SHD 治療のこれまでの歩みを振り返り、一般診療のなかからどのように対象となる患者を見つけるべきか、具体的な症状や病歴を交えてご教授いただきました。さらに各論として、大動脈弁狭窄症に対する経カテーテル大動脈弁留置術 (transcatheter aortic valve implantation: TAVI) やフレイル評価、僧帽弁に対するカテーテル治療、左心耳閉鎖術や卵円孔開存閉鎖術といった脳梗塞予防策、成人先天性心疾患の治療から、外科治療の進歩 (minimally invasive cardiac surgery (MICS) など) や今後の展望に至るまで、網羅的に取り上げました。

本特集が、先生方の SHD に対する理解を深め、1 人でも多くの患者が適切な治療へとつながるための一助となれば幸いです。

北里大学医学部循環器内科学  
阿古潤哉